



大阪府立北野高等学校図書館

## 第 1 号

2014.5.23 発行

「人生は邂逅（出会い）である」と言った人がいました。読書も邂逅だ、と私は思います。

北野の図書館に足を向ける。書棚を見渡し、気に入った本を取り出す。読んでみて自分が思っていた内容と違う場合もあります。

ふと目にとまり、抜き出した本を読んで、ついつい興味をそそられ、次へ次へと読んで行きたくなる本である場合があります。新しい世界が広がります。

自分のお気に入りの本との邂逅。本は、黙って、あなたとの出会いを待っているのです。

今回、図書館に入っている本の中からいくつか紹介していききたいと思います。書名の後ろにある（ 9 1 3 / M 8 3 / 4 ）などという記号は図書館での請求番号です。

英国一家、日本を食べる マイケル・ブース 亜紀書房（ 3 8 3 / B 2 / 1 ）

フードジャーナリストであるマイケル・ブースが、妻と6歳と4歳の2人の息子の家族4人による、日本の食べ歩きである。東京、北海道、京都、大阪、福岡、そして、沖縄をじっくり3ヶ月にわたって食べ歩いた。

毎日200万人が利用する新宿駅、デパートの食料品売り場（いわゆる「デパ地下」）、友人の紹介で訪問した相撲部屋（東京）など。相撲力士と、彼の息子たちはどのように対応したか、本書を読んでのお楽しみ。

日本料理、日本の生活習慣、マナーなど、我々が当たり前に感じていることが、彼らには新鮮で、彼の目と言葉を通じて、日本の日常の奥にあるものを甦らせ、我々に対して知識を新たにさせてくれる。

日本の再発見になります。

生命の逆襲 福岡伸一 朝日新聞出版（ 4 6 0 / F 3 / 3 ）

「逆襲」という怖い題名の本だが、内容はそんなに怖くなく、次々と話題が展開される。4ページずつでの読み切りとなっており、非常に読みやすい。

17世紀の画家、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」の作品の話が出てくる。かと思えば、同じく17世紀の科学者、レーウエンフックも登場する。彼は、自分で顕微鏡を作り、水中の微生物、血球、精子などを初めて見いだした。彼の観察記録が残っている。さらに、顕微鏡観察のスケッチが挟み込まれている。そのスケッチが「陰影が驚くほどつややかに描かれていた」のだ。この同じ時代のフェルメールとレーウエンフック、交流があったのか、無かったのか、本を読んでのお楽しみである。

サンクト・ペテルブルグ 小町文雄 中央公論新社（ 2 9 3 / K 1 2 / 1 ）

著者は、在ソ連大使館勤務の経験者である。これは、著者が自分の目で見た、実感のこもる、実物に即したサンクト・ペテルブルグ散策の手引きである。

サンクト・ペテルブルグというのは、なんとも不思議な町としか言いようがない。この名を聞くと、人はまず、見たこともない白夜を想像するのではあるまいか。深夜を過ぎても暗くならず、美しい街並みが白い光の中に浮かび上がるという、想像力をかき立てる不思議な景色。

白夜を幾晩か経験するだけで、人はこの不思議な町にとらわれたようになってしまい、精神の均衡を失いそうになる。ゴゴリの語る怪奇譚やドストエフスキーが描く心理的葛藤の世界にも、あまり違和感をもたずに入れるようになってしまう。

サンクト・ペテルブルグは、モスクワに次ぐロシア第二の都市である。サンクト・ペテルブルグの人口は現在（2006年）470万人、面積は市街地が570km<sup>2</sup>（うち約1割は水面）である。因みにモスクワの人口は850万人、面積は880km<sup>2</sup>であり、東京23区の面積は621km<sup>2</sup>で、人口は850万人である。

この町の位置する北緯60度というと、北極圏までたったの700キロ、ヘルシンキ、オスロなどとほぼ同緯度である。バルト海の東部、フィンランド湾の東端にあり、そこへ陸地からネヴァ川が流れ込んでいる。その河口の三角州群の上に、ピョートル大帝がこの町を建設したのであった。1703年の起工である。当時強国だったスウェーデンの勢力圏内の荒れ地に、ヨーロッパへ開く窓となる町を作ろうとしたのである。ロシアを強国に育て上げた独裁君主の、強い意志によってわずかに20年ほどの間に作り上げられたのである。短期間のうちに築かれた非ロシア的な、人工的な町である。ロシアの文化・生活伝統とはなじみの薄い異国の洋式でつくられた町である。ピョートル大帝が国づくりの舵を西欧化にきってこの町を首都に定めて以来、ロシアは明治維新の日本に似た、ある意味では矛盾に満ちた発展を遂げることになった。それまでのロシアは、ヨーロッパ文化から切り離され、半分アジア的な独特な国となっていた。「ヨーロッパへの窓」となったこの町はすっかり西洋風になり、生活形態や風習も西欧化した。衣食住のいずれもがヨーロッパ風になった。ロシア帝国が発展し、強化されるとともに、整備され、拡大し、豪壮化した。今日まで残る大規模な宮殿、教会、その他の建造物が続々と建てられた。近代ロシア史の多くのドラマは、この町を舞台に繰り広げられた。首都サンクト・ペテルブルグは、ロシア帝国の政治・外交・軍事・産業・学問・芸術の中心として繁栄した。

20世紀に入り、革命が起こり、レーニンは防衛上その他の理由から、首都を再びモスクワに移した。サンクト・ペテルブルグは、「レーニンの町」レニングラードと改称された。

ソ連崩壊後ふたたび本来の名称サンクト・ペテルブルグを取り戻した。

今、豊かなネヴァ川の青い水の向こうに、すくと立つペテロ・パウロ寺院の鋭い金色の尖塔。すぐ対岸ワシーリィ島先端に立つえんじ色の二本の灯台、青い塔をもつクストカメラ、その並びの黄色いメンシコフ邸。そちらから中心部を振り返れば、そびえ立つイサーク寺院の金色の丸屋根、海軍省の金色の尖塔……。書いても書いても、サンクト・ペテルブルグの名所は書ききれない。サンクト・ペテルブルグは、町全体が芸術作品であり、博物館のような所なのである。

副題は、「最後に残った天然食料資源と養殖漁業への提言」である。

本書で扱っているのは、河川と海洋を行き来するサケ、近海のシーバス（ズキ目）、大陸棚外縁斜面のタラ、遠洋のマグロである。この順番は、歴史上（ヨーロッパの）人類が漁業の対象として次々に漁の対象としていった魚である。それはまた、著者が幼少から始めた釣りの発展の順番と一致する。

漁業資源の枯渇の時代に入り、資源保護と養殖の現状を探りに、著者は世界を駆けまわる。そこで、巨大産業の破壊的漁獲と戦う人や、様々な工夫と努力を重ねた養殖家たちにインタビューをし、魚を釣り、海に潜る。しかし当然だが、何でも禁漁にし、養殖すればよいという単純な結論には至らない。

日本でのこれらの魚のいくつかを見ていこう。

サケは世界全体の漁獲量のなんと三分の一は日本で消費されている。国内漁獲量は20万トン以上あるが、それと同じくらい輸入している。かつてサケは、ルイベにして寄生虫を殺さなければ生食できるものではなかった。現在スーパーマーケットと回転寿司店では大量のチリ産の養殖サケが幅をきかせていて、生食が可能になっている。

マグロ、ことにクロマグロは圧倒的に日本人が食べている。しかし世界中の多くの国が捕獲をしている。日本へ輸出するためだ。最近では中国へも向かっているようだ。テレビ番組では食べ物を扱うシーンが多く、クロマグロもよく登場する。しかし、そこではおいしさと豪華さを謳い、解体ショーを見せて視聴者の気分を高揚させるものがほとんどだ。マグロの個体数減少に警鐘を鳴らし、対策を考えさせる番組はあまり見あたらない。

世界的には人口が衰えることなく増加していき、環境変化が激しい現状において、食料供給資源がますます逼迫している。著者は環境保護を見据えつつ、我々の今後の対応すべき事柄（漁業活動の制限、国際的な保護活動、食物連鎖の底辺を守る活動など）を、訴えている。

世界一賢い鳥、カラスの科学 ジョン・マーズラフ/トニー・エンジェル  
河出書房新社 ( 4 8 8 / M 3 / 1 )

本書の原題は『Gifts of the Crow』という。カラスが人間に与えてくれる物質的、精神的な贈り物という意味と、カラスが天から授かった贈り物、つまり彼らの天賦の才という両義のタイトルである。

彼らの研究活動はフィールド調査が中心だが、本書はカラスの神経生物学にまで大きく踏み込んだものだ。動物の脳の画像診断を専門にするワシントン大学医療センターの同僚との共同研究で、野生のカラスを捕獲し、比較実験のために異なる条件を与えた後、その脳をスキャンするという手法は、まるで人間の脳科学や心理学の実験のようである。

動物好きな人はとりわけ、これまでいかに自分の感情を投影し、動物や鳥をいわば擬人化して見てきたかにも気づかされるだろう。仲間の死骸に集まるカラスなどを目撃すれば、確かに弔いを連想したくなる。しかし、「カラスやワタリガラスが死んだ仲間のまわりに集まるのは、自分自身が生存する上で、別のカラスの死の原因と結果を学ぶことが重要だからだと我々は確信している」

と、著者らは主張する。偉そうでも、カラスは所詮動物で、人間のような心は持ち得ないということだろうか。

鳴禽類の音声学習の仕組みは、乳幼児が言葉を覚える過程にも、外国語の学習にも大きなヒントを与えそうだ。社会的に重要なパートナーの声や、恐怖や喜びを伴う状況で聞いた音が優先されて記憶されるのは、神経伝達物質のドーパミンが放出されて活動的なシナプスを強化し、新たな刺激でシナプスが発火しやすくなるからだという。トニー・エンジェルが飼っていたワタリガラスのマコーが、彼の声に懸命に聞いてまねする学習過程などは実に健気で、かつ興味深い。

カラスについて知ること、わが身を振り返られる。これもまた、カラスが与えてくれた贈り物に違いない。

次は、B先生が推薦する書物です。

現代中国の父 鄧小平 上・下 エズラ・ヴォーゲル 日本経済新聞出版社  
( 2 8 9 / T 3 5 / 1 - 1 , 2 )

ジャパン・アズ・ナンバーワン エズラ・ヴォーゲル TBSブリタニカ  
( 3 0 2 / V 1 / 1 )

1979年にエズラ・ヴォーゲルは『ジャパン・アズ・ナンバーワン』で日本を絶賛した。不覚にも、私はどうせ際物だろうと思い読まなかった。だがベストセラーとなったこの本の著者名を覚えていた。著者に興味を持って、『現代中国の父 鄧小平』を読み始めると、ヴォーゲルが大学者だとわかった。平易で客観的な叙述。現代史への深い理解。文献資料の博搜。多くの人々への聞き取り調査。ヴォーゲルは英語はもちろん、日本語も中国語も話せるのだ。共産党独裁のもとで、外からは見えにくかった中国現代史の霧が晴れていく面白さで、上下2巻の大著を一気に読んだ。読み終わると、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』を読みたくなった。絶版になっているが、図書館にあった。ヴォーゲルはアメリカへの教訓としてこの本を書いたと序文で記している。だが、その後の30数年間に、アメリカは日本をあまり学ぼうとはしなかった。一方、日本はアメリカ化した。1970年代の日本は「総中流社会」だったけれども、今は非正規労働者が多い格差社会となった。ヴォーゲルがほめ称えた日本の長所が一つ、しかも根幹の部分が失われたのである。

日中平和友好条約を結んだ鄧小平は1979年に来日するが、ヴォーゲルは『鄧小平』で福田赳夫首相ら政財界の要人を賞賛している。「来日した鄧小平に日本の指導者たちが示した言葉や行動も、日本国民によい作用をもたらした。数十年後の若い世代でさえも、金銭上の些事やつまらぬ政治上の論争に明け暮れている後継者たちと違って、この世代の指導者たちを「大物」と評した。」(下巻 456頁) 日中両国をよく知るヴォーゲルは、尖閣諸島や歴史認識で両国が対立している現状を憂慮している。習近平は、歴史の荒波をくぐった周恩来や鄧小平のような「大物」ではないかもしれないが、日本の指導者たちの劣化も著しいようである。